

2 キーワード及び用語の解説

番号	ページ	キーワード または 用語	は語
1	4	構音障害	<p>語（例「とけい」）は、音節（「と」「け」「い」）から成り、各音節を構成する語音（「と」の〔t〕と〔o〕、「け」の〔k〕と〔e〕、「い」の〔i〕）から成る。この語音を発声器官を通じて作り出すことを構音という。構音障害は、下記～のように、この構音がうまく出来ず、その結果誤って語が発音されてしまうことをいう。</p> <p>音の省略（例 風船 ウーセン） 音の置換（例 コップ トップ） 音の歪み（文字で表記できないが、聞いた感じに歪みがある） 音の添加（例 じどうしゃ じんどうしゃ）</p>
2	4	社会的スキル (ソーシャルスキル)	<p>社会生活を進めていくうえでの技能。社会性や社会的能力の下位概念。（遊びやしつけを含む広義の）学習により習得されるもの。他者とのかかわりの中で自分の行動を調整し、他者に影響を与えて行動の結果を望ましい方向に導いていく技能。共感性（他者の意図や感情などを正確に理解し、他者の立場に立って物事を考え、見ることができる力）自己統制力（自分の行動・感情をコントロールする力）知的柔軟性（必要に応じて行動のパターンを変えられる力）なども含まれる。</p>
3	4	非言語性LD	<p>主として視覚・空間認知に弱点がある。日常的な言語能力は比較的高いが、具体的な行動面で思いがけないつまづきがある。運動能力に弱点がある場合が多く、不器用さや協応動作の悪さにつながる。漢字の習得や読みが苦手な例もある。しかし、注意・記憶に弱さがなければ、得意な機械的学習の結果として読み能力・言語能力は平均水準にあることが多い。状況認知が悪く、周囲が理解しにくい行動もあるため、対人関係に問題をもちやすい。言葉による援助や再言語化による行動調整を図る。</p>
4	5	自己有能感	<p>肯定的な自己像。失敗体験が積み重なると「自分には能力がない」と自己について否定的なイメージを持ちやすい。生活・遊び・学習・役割活動の全部の面で成功体験を持てなくても、どこかにおける成功体験での成就感を通じて形成する「得意とは言えないが、自分にもできる」という自信の基盤。「自信」は「得意とする」ニュアンスもあるので、この研究では、自己有能感とした。</p>

5	7	P - F スタディ	<p>ローゼンツアイクによって、欲求不満についての諸理論を検討するために考案された研究手段で、児童用・青年用・成人用がある。（そのためテストと呼ばず、スタディという）24種の日常、誰でも遭遇するような欲求不満場面によって構成され、絵は線画を用い、人物の表情は省略してある。場面を話し言葉で説明し、心の中に浮かぶ最初のことばを書かせる。その反応語に、心理が投影されているものとして、欲求不満場面での攻撃的反応の方向や型、自我防衛の心の動きなどを検討・分類し、事例解釈をおこなう。なお、本研究の事例では検査目的ではなく、その用紙を場面理解の援助に活用しているだけである。</p>
6	7	認知	<p>心理学で、人の能動的な情報収集・処理活動（知覚、判断、決定、記憶、推論、課題の発見と解決、シンボルや言葉の理解と使用など）を総称する用語。能動的な情報収集・処理活動とは、人が生まれつきもっている情報または経験から得た情報に基づいて、外界の事物に関する情報を選択的にとり入れ、それによって事物の相互関係などに関する新しい情報を作ったり蓄積したり、他者に伝達したり、あるいはその情報を用いて適切な行動をすることである。</p> <p>たとえば、音声が聞こえているだけでなく、その音声を意味づけながら聞くことは聴覚認知であり、物が見えているだけでなく、位置、形、色、大小、相互関係など対象を意味づけながら見ることを視覚認知という。また、自分の体の向き、体と周囲の事物との位置関係や、事物相互の位置関係、方向、大小などを意味づけて、視覚や平衡感覚などを通じて理解することを空間認知という。</p>
7	8	視覚認知	<p>認知の項(6)参照</p>
8	8	重複言語性 LD	<p>言語性LDの項(14)参照</p>
9	10	聴覚認知	<p>認知の項(6)参照</p>
10	10	包括性LD	<p>特定の領域ではなく、全体に部分的弱さが散在する。タイプの理解から離れ、個々の児童生徒の個人内差異の特徴で援助の方法を柔軟に選択し実施する必要がある。LDの中で最も把握しにくく、適切な対応が遅れ、二次的な困難が表れやすい。</p>
11	10	転導性	<p>中枢神経系に機能障害がある場合に、比較的多く見られる心理の特徴の一つ。周囲の刺激に容易に反応してしまうとか、重要なものに注意が向かず、さほど重要でないものに注意が向いてしまう傾向</p>

			を指す。従って、動く物、音、色などあらゆる感覚刺激が誘因となり、学習が困難になる。 類似の状態の「注意の持続の短さ」は、周囲の誘因刺激がないにもかかわらず、集中できない傾向をいう。
12	12	場面緘黙	特定の場面（幼稚園や学校など）だけ無言になるもので、重度になるほど無言となる場面が増える。緘黙は自己防衛反応であり、場面緘黙は特定場面への回避反応と考えられる。
13	12	空間認知	認知の項(6)参照
14	14	言語性LD	主として言語能力に弱点がある。聴覚認知の弱さのため、一斉指導の中で言葉による指示を理解しにくい。読み書きなど国語の基礎能力が低い。全般的に低く評価されやすいが、具体的行動面では潜在能力の高さを示す。注意・記憶の弱さが重ならないければ、計算能力は平均的水準であることが多い。注意・記憶の弱さが重なる場合を、重複言語性LDとする。 言語理解を助けるために、具体物を使った視覚的援助が有効。
15	14	注意・記憶性LD	主として注意集中力や短期記憶力に弱点がある。基礎学力のあらゆる面に影響する。繰り上がり、繰り下がり、九九などの算数の演算能力だけでなく、学習内容の理解・保持にも負担をかける。そのために学習全般に対する拒否感情が強くなりやすく、心理的不安傾向がある。記憶の負担を軽くするため、見ながら考えられる視覚的な補助教材の使用、演算や思考の過程をメモする習慣形成などの援助が有効。 自分に合った学習の仕方を共に探し、学級でも可能な限り許容する。 医学的症状としての注意欠陥・多動症候群と重なると、課題をやり遂げようとする目的指向性が弱まり、多動や衝動的傾向につながりやすい。
16	16	伝音性難聴	外耳・中耳伝音系の器官(耳殻・外耳道・鼓膜・耳小骨など)における異常による難聴。先天性もあるが後天性の場合が多く、中耳炎・耳管閉塞症・頭部外傷などが主な原因。疾患により難聴の程度は多様である。

17	19	学習の 前提能力	<p>この研究では、学齢期の学習のための基盤となる諸能力を表す。広義には、呼吸・栄養摂取・体温調節・排泄などの生理的基盤の諸機能も含む。一定時間、一定範囲の場で目的指向的に、知的能力・肉体的諸能力などを働かせて学習内容を習得するのに必要な感覚機能、情緒の安定、自己統制力、共感・信頼・協調など社会的スキルなどを総称する。どの能力も、学齢期になっても習得を継続しなければならないが、学齢期より前に習得すべきニュアンスを強めるため「前提」とした。学習に向かう力とほぼ同義。</p>
18	19	情緒の解放	<p>この研究では、遊びを主とした援助方法によって、心や体を十分動かすことで、子どもが例えば楽しい時は笑顔や活発な動きを見せたり、悲しい時は泣いたり沈んだ表情を見せたりするような自然な感情の表出ができることを表している。例えば場面緘黙児(事例6)の援助におけるねらい「心身の緊張を和らげ、活発な自己表現活動をうながす」「話す」意欲や態度を育てる」の基盤を示す。</p> <p>情緒とは、体験(外界からの働きかけや刺激)に対する反動的な感情の動きである。情緒の解放とは、なんらかの原因やきっかけのため反応や動きが止まった感情のこだわりがなくなり、周囲の人(家族も含む)との気持ちのやりとりができるようになることとも言える。</p>
19	20	学習に 向かう力	<p>学習の前提能力とほぼ同義である。</p> <p>LDを含む学習困難な児童生徒は、学齢期にありながら、それまでに習得すべき学習の前提能力に弱さがあると言える。しかし、学齢期に達している児童生徒にとっては、「前提」というよりもむしろ「弱さを克服して」「自己有能感をもって」というニュアンスで、「向かう」と表現する方が適切であると考えるので学習に向かう力とした。</p>
20	23	PRSテスト	<p>マイケルバストによって考案されたLD児診断のためのスクリーニングテスト。平均的な知能をもち、聴覚や視覚にも問題がなく、情緒的な適応も十分できているのに、それに応じた学習の結果が得られない子どもたちを識別することを目的とする。</p> <p>聴覚的理解と記憶 話しことば オリエンテーション 運動能力 社会的行動</p> <p>の5領域24項目について、5段階で評価する。</p>

21	23	新版 K 式 発達検査	<p>京都市児童院（現京都市児童相談所）において乳幼児発達検査の研究から開発、改良された検査法で「K式」のKは、京都の頭文字。</p> <p>新生児～14歳すぎまでを適用範囲とし、検査項目に対する子どもの反応を観察する。検査項目は 姿勢運動 認知適応 言語社会の3領域に大別され、各領域と全領域について子どもの発達が到達している年齢段階を測定する。</p>
22	23	ウィスクアール WISC-R 知能診断 検査法	<p>ウェックスラーによって考案され、その後改良が加えられた児童生徒（6～16歳11か月）用の検査法。問題が言語性と動作性によって構成され、結果は言語性IQと動作性IQを別々に、かつ両者を総合して全IQが算出できる。</p> <p>言語性IQと動作性IQの差（ディスレパシー）や、各検査評価点のプロフィールをみることで、知的能力の偏りを特徴とするLDを判断するための検査群（テストバッテリー）の一つとしてしばしば用いられる。</p>
23	23	K - A B C 心理教育 アセスメントバッテリー	<p>カウフマン夫妻が、認知心理学や神経心理学の理論と研究成果に基づき作成した検査法。2歳～12歳11か月までを適用範囲とし、14種類の下位検査によって構成されているが、年齢によって実施される検査が異なるので、実際に一人の子どもにおこなうのは6～11種類である。</p> <p>K - A B C心理教育アセスメントバッテリーの特徴は、 知能（情報を処理して新しい問題を解決する能力）と、習得度（数やことばの知識と読みの力）を分けて測定すること。</p> <p>知能を、「継次処理」または「同時処理」の認知処理過程で測定することにより、子どもの得意な認知処理スタイルを発見し、検査結果を指導に結びつけることである。</p>
24	23	フロスティック 視知覚発達 検査	<p>フロスティックによって開発された、視知覚障害に対する援助の手がかりをつかむことを目的とする検査法。4歳～8歳までを適用範囲とし、11枚の絵カードや3枚すかしの採点盤などからなる35枚の検査用紙を用いる。</p>
25	32	田中ビネー式 知能検査	<p>知能テストの創始者であるフランスのビネーの方法をもとに、アメリカのターマンが、スタンフォード・ビネー改訂版を公刊した。それを田中寛一が、日本でも活用できるように改訂を重ねて作った検査法。年齢別知的発達水準を設定して、知能発達の状態を把握する。</p> <p>検査内容は、単語の知識・文章の完成・直接記憶・道徳判断など多くの質問から構成され、問題数は120問になっている。2歳～成人</p>

		までを適用範囲とし、教育相談・進路相談・生徒指導・障害児教育・医療相談など様々な分野で幅広く活用されている。
26	32	鈴木ビネー式 知能検査 スタンフォード・ビネー知能検査をもとに、鈴木治太郎が出版した検査法。2歳～成人までを適用範囲とし、知能の発達水準を把握し、知的障害の診断と指導に役立てられている。 検査は、言語・数字・用具などを媒介とした問題がやさしいものから難しいもの順に並べられている。
27	32	I T P A 言語 学習能力検査 イリノイ大学のカークらによって開発された発達障害児のための心理診断検査。子どもの知的活動能力の個人内差異をコミュニケーション過程の面から捉えて分析し、治療教育の手がかりを得ることを目的としている。3歳～8歳11か月までを適用範囲とし、結果は、評価点によるプロフィールと言語学習年齢で表される。 言語学習能力については、3つの次元を仮定している。 回路 - 人が感覚刺激を受け取り、それを解釈して外界に反応する情報伝達の通路。本検査では、言語学習に最も関係深い聴覚・音声(聞いて話す)、視覚・運動(見て行動する)の2回路を取り上げている。 過程 - ことばを習得して用いるための3過程。(受容過程)見たもの聞いたものを理解する。(連合過程)その概念や言語シンボルを内的に操作する。(表現過程)それを言葉や動作で表す。 水準 - コミュニケーション行動の2つのレベル。(表象水準)ものの意味を伝えるシンボルを扱う複雑高度なレベル。(自動水準)あまり意識せず、反応が自動的に行われる。
28	32	継次処理と同時処理 継次処理は、情報を連続的かつ逐次的に分析し、認知する情報処理である。順序だてて理解することが比較的得意なやり方ともいえる。 同時処理は、情報を概観可能な全体に統合し、全体から各部分とそれらの関係を認識する情報処理である。ことばでの指示よりも、絵カードやシンボル表示の理解を得意とするともいえる。 K - A B Cにおいては、継次処理の能力は、下位検査の〔手の動作〕〔数唱〕〔語の配列〕によって、また同時処理の能力は下位検査の〔魔法の窓〕〔顔さがし〕〔絵の統合〕〔模様の構成〕〔視覚類推〕〔位置さがし〕によってそれぞれ測定される。

キーワード及び用語の解説の作成にあたって参考にした文献

学苑社	「障害児理解の方法」	坂本龍生他編著
日本文化科学社	「心理テスト法入門」	松原達哉編著
日本文化科学社	「学習障害児の教育」	上野一彦・牟田悦子共編著
福村出版	「心身障害辞典」	石部元雄他編集
平凡社	「心理学事典」	梅津八三他監修
丸善メイツ	「K - A B C アセスメントと指導」	前川久男他編著